

【V 考察】

「ボランティアの受入数」について

- 学習支援ボランティア
 - ・ 昨年度に比べて、全体的に減少している。学校の統廃合に伴い小中学校数の減少もその一要因と考えられる。公民館等社会教育施設においても減少が見られる。今後も、各学校等の実態に即した計画を立てるとともに、ボランティアの確保に努める必要がある。
- 読書活動ボランティア
 - ・ 昨年度に比べて、減少している。一方、中学校や高等学校では、受入数が増加している。今後もボランティアの確保に努め、効果的な運用に努める必要がある。
- ノートテイクボランティア
 - ・ 昨年度に比べて、増加している。今後もボランティアの確保を進め、児童生徒にきめ細やかな支援ができるよう努める必要がある。
- 外国出身者支援ボランティア
 - ・ 昨年度に比べて、減少しているものの、日本語を母国語としない児童生徒が増えていることから、今後も関係機関と連携を取りながらボランティアの拡充に努める必要がある。
- 家庭教育支援ボランティア
 - ・ 昨年度に比べて減少している。今後も、県教委主催の「親子の学び応援講座」事業による、小中学校における家庭教育学級等への支援や、家庭教育支援者の活用の啓発に努めたい。
- 病院訪問学習支援ボランティア
 - ・ 昨年度に比べて減少しているものの、年々受入数が増傾向にあることから、今後もボランティアの確保に努める必要がある。

「体験活動」について

- 中学校（特別支援学校中学部を含む）においては、実施回数、実施時間数ともに増加した。
小学校（特別支援学校小学部を含む）においては、実施回数は増加したが、実施時間数は減少した。
高等学校においては、実施回数は減少したが、実施回数は増加した。
- 指導資料を活用するとともに、外部講師等を招いて、体験的な活動を取り入れて放射線教育や防災教育を実施する学校が増えてきている。
- 中学校においては、職場体験を実施する際の受け入れ事業所の選定等に苦労している学校も多いが、地域やPTA等の協力を得ながら計画的に進めている。
- 講師を招聘し体験活動を行う際、講師との打合せの時間確保を課題としている学校も多いが、学校支援地域本部事業等を実施し、コーディネーターがいる地域においては、その連絡調整機能により、スムーズに体験学習等が行われている。
- いずれの学校種でも、キャリア教育の視点から体験活動を行う学校が増えている。
特別支援学校においては、卒業生の就職先の事業所見学等を行い、勤労観等を育成す

「ボランティア活動」について

- 小学校（特別支援学校小学部を含む）及び高等学校（特別支援学校高等部を含む）においては、実施回数、実施時間数ともに増加した。
中学校（特別支援学校中学部を含む）においては、実施回数は減少したが、実施時間数については増加した。
- 「総合的な学習の時間」の時数縮減等により、ボランティア活動を教育課程に位置づけて実施することが難しくなっているが、特に高等学校では、生徒会活動や生徒の自主的な取組等により、教育課程外での活動が見られるようになっている。
- 依然として放射線量を考慮しながら活動している地域もあるが、そのような状況にあっても、各学校において創意工夫を凝らして活動している様子がうかがえる。
- 各学校の伝統的な活動としてボランティア活動を実施している学校も多い。伝統を受け継ぐとともに、毎年工夫を凝らした活動が行われている。
- 今後も、児童生徒の発達段階に応じた活動内容の工夫と、ボランティアの意義や目的についての理解を深めることが必要である。